

巻頭言

人口減少社会の始まりとお寺の役割

現代宗教研究所所長 三原正資

グラフ「日本の総人口の長期的トレンド」(国土交通省国土計画局作成)を目にしたとき、思わず私は息をのんだ。江戸時代の中期から明治維新にかけて三〇〇〇万人台で推移していた人口は、あたかも急坂を駆け上るように増加する。敗戦時には七〇〇〇万人、そして平成一六年(二〇〇四)には一億二七〇〇万人に達したのち、急坂を駆け下りるように減少する。昭和二三年(一九四八)生まれの団塊世代の私は、小・中学校の社会科の授業では日本の人口密度の高さを強調されたことが記憶に底着していることから、これからの日本は「普通の国」に生まれかわっていくとの思いによって、ほっとした心持ちになった。

しかし、日本史上初の人口減少が社会に与える衝撃はすさまじい。それは八年ぶりに実施された平成二四年度日蓮宗宗勢調査の結果にあらわれている。

平成四年(一九九二)から二四年(二〇一二)にかけての檀家数増減回答の推移をみると、檀家数が増加したと答えた寺の割合は五三・二%(平成四年)、三九・九%(平成八年)、三七・六%(平成一六年)、二五・三%(平成二四年)と減少し、檀家数が減少したと答えた寺の割合は八・三%(平成四年)、一六・九%(平成八年)、二二・九%(平成一六年)、三

六・八%（平成二四年）と増加している。今回、ついに檀家数が増加したと答えた寺の割合を、檀家数が減少したと答えた寺の割合が上まわったのである。今後、人口減少が進むにつれて、当然、檀家数が減少したと答える寺の割合は急速に増加するだろう。

この現実が社会にもたらすものは何か。人口減少社会という事態を「日本人の加齢に伴う生産年齢人口減少」ととらえて現在の経済状況の本質を分析したエコノミスト藻谷浩介氏は『デフレの正体―経済は「人口の波」で動く―』（角川oneテーマ21 二〇一〇年）の中で次のように言う。

戦後復興の中で、たまたま数の多い団塊世代が生まれた。彼らが加齢していくのに伴い、そのライフステージに応じてさまざまなものが売れ、そして売れなくなっていく。この単純なストーリーで説明できてしまう、そして予測できてしまう物事がいかに多いことか。（略）

（二〇）一〇～一五年には、史上最大勢力の団塊世代が六五歳を超えます。実際には彼らの一次退職は足元の五年間にもう始まっているので、経済への影響はすでに出ているのですが、彼らのほとんどが最終的に無職になっていくこれからの五年間こそ、日本が史上最大の「人口オーナス」（生産年齢人口が減少に転じ、高齢者が急増している状態）を経験する時期となります。社人研の中位推計では生産年齢人口が五年間で四四八万人減少します。（略）

車や小売商業施設だけでなく、住宅やオフィス、土地そのものも、空き物件の過剰と、さらなる価格の低落に直面することが不可避でしょう。もちろん税収面への影響も深刻で

す。個人所得税収が下がるだけでなく、消費水準が下がるので消費税も伸びません。そして何より、住宅やオフィス、土地そのものの過剰が、価格低落を加速させ、固定資産税収を減らすことになります。

藻谷氏は、こうして、これからの日本では

数字上の「好景気」と実態としての「内需縮小」が、同時に延々と続く

と述べている。

日蓮教団にとって「内需縮小」とは檀家数の減少に加えて布施収入の減少を意味する。さて、藻谷氏はわが国の状況を改善する方策を示している。

我々は日本を見限って脱出すべきなのではない。日本のこの状況に耐えて、対応する方策を見出して、遅れて人口成熟する中国やインドに應用していくべきなのです。アジアに低価格大量生産品を売り続けるのではなく、日本で売れる商品を生み出し、日本で儲けられる企業を育てることで、高齢化するアジアに将来を示す。これが日本企業の使命であり、大いなる可能性なのです。

私が深い確信をもって想像するのは、「多様な個性のコンパクトシティたちと美しい田

園が織りなす日本」の登場です。人口減少の中で一人一人の価値が相対的に高まる中、その中で暮らす人々も、それぞれやりがいのあることを見つけて生き生きとしています。そうした未来の実現に向けて自分の地域を良くして行こうと活動する老若男女はどんどん増えていくと、私は新たな風の始まりの部分を日々全国で実感しているのです。

私は平成二二年度から全国各教区教化研究会議に参加して、全国の教師の発言に藻谷氏と言う「新たな風の始まり」を実感してきた。少なくとも教師が、お寺が歴史的になつてきた地域の中心としての役割を様々の行事を通じて果たし、地域の復活を目指したいという熱意にもえている。

賢愚経というお経がある。豊富な説話によって古来から知られ、宗祖も法華題目抄や消息文に引用されている。この経の大施杼海品には人びとの幸せのために遠く海に如意宝珠を求めた大施菩薩の願行が説かれている。今、私たち教師に必要なものこそ、この大施菩薩の願ではなからうか。同様のことは法華経化城喻品にも示されている。

日本の近現代史をたどるたびに、私はこの化城の物語を想起する。昭和三九年（一九六四）の東京オリンピックから今日に至る日本は化城の中で享楽してきたのではなからうか。そして、三・一一以来、多くの人びとはこの繁栄はまやかしかではなかったかと感じている。この繁栄を支えた五〇基の原子炉の産みだす電力が、永劫にわたって人がコントロールできない高濃度放射性廃棄物を排出し続けるという現実に向き合っているからである。

私たちは、宝処に向かつて歩み始めるときに立ち会っている。

第四十五回中央教化研究会議 基調報告

原子力文明再考

三 原 正 資

司会 「原子力文明再考」と題しまして、基調報告とさせていただきます。

私の会議資料の中で「原発の稼働」という字を「働」を「動く」という字をうっかりして書いており、人偏がついた「働く」という字です。原発は働かせるものだということを改めて知りました。直していただきたいと思えます。

この原発の問題は、歴史的に見まさんとよく分かりません。原爆の開発、投下、戦後の核問題と日蓮宗、あるいは原発建設と現宗研の動向。それから、三・一一後の、この一年間の現宗研の調査活動等々をこれからお伝えしたいと思います。

皆さんご存じのように、今日、砂漠化している地帯は、かつては古代文明が栄えたところです。この原子力をエネルギー政策の基本とする今日の現代文明世界はあと五十年、百年たったときに、どう変わっていくのか。最悪の場合に、われわれの生存環境を破壊するという可能性もあるわけです。それでは、スライドをお願いします。

これは、史上初の核実験です。一九四五年七月十六日。これは「トリニティ」と名付けられました。トリニティというのは「聖なる三位一体」。これは、人間の力の及ばない「神の力」「神の火」という意味が込められています。

これは一九三九年、ヒトラーのドイツが原爆を開発する前に、どうかアメリカで核兵器を開発してもらいというアインシュタインの要請に応えてトルーマンが開発したものです。この開発された原爆は、八月六日に広島、八月九日に長崎に落とされます。このとき、トルーマン大統領は、「われわれは、歴史における最大の賭けに二十億ドル使ったけれども勝ったんだ」と、声明文を出しています。この原爆を開発した科学者が「私の手は血で汚れている」と、言いますとトルーマンは自分のハンカチを出し、「じゃ、これで拭きたまえ」と言ったと伝えられています。

これは実に痛ましい原爆の慰霊碑です。広島市平和公園にあります「広島市立高等女学校原爆慰霊碑」です。この中央の女学生が抱いているのが「E=MC²」。あのアインシュタインが発見した公式で、これが原爆を象徴しているんですね。これをいかにも大事そうに抱いているところ、当時の占領軍の影響下で検閲があったことを見取ることができます。本当に痛ましい慰霊碑だと思います。

さて、これは、ちょうど広島原爆七回忌の年に岩波書店から発行されました『原爆の子』という本です。原爆の遺児、孤児、あるいは被爆した子どもたちが書いた文章が載っています。

驚くべきは、この序文です。その中に、「私たちは、原子力が持つ偉大な善をもたらす道―原子力の平和的利用に力強い期待をかけている。広島島の街々に原子エネルギーを動力とする灯火が輝き、電車が走り、広島こそ平和的条件における原子力時代の誕生地でなくてはならない」とあり、今日の目から見ますと、目を疑うような文章です。わが国の原子力政策とは、占領下、米国主導で始まったということを忘れてはならないと思います。

これは一九五四年三月一日、「ブラボー」と名付けられた水爆実験のようすです。このときに、第五福竜丸乗組員の被爆が起こったわけです。南太平洋ビキニ環礁の水爆実験によって、第五福竜丸に乗り込んでいた久保山愛吉無線長が後に亡くなります。他に、島々の島民合わせますと約二万人が被爆したと言われています。

これは東京の夢の島にある「第五福竜丸記念館」の内部のようすです。この木造船で、よく南太平洋までマグロ漁

業に行つたと思います。皆さん、見学に行つてもらいたいと思います。

これは、今日いわれる風評被害です。「当店では原子マグロは使っておりません」という広告から、この当時から放射能の恐ろしさは、みんな知っていたことがわかります。

さて、この第五福竜丸の被爆事件をきっかけにして、核実験反対運動が起こり、三千万人以上の反対署名が集まつたと言われています。当時は、東西冷戦、アメリカと旧ソ連が対立しておりました。その中で、日本がソ連側に傾いていくのではないか、アメリカ政府はこの日本の動きに危惧を持ったわけです。こういう状況の中で「第一回原水爆禁止世界大会」が広島で開かれました。これと前後して、昭和三十二年、第一回世界大会の二年後、日蓮宗世界立正平和運動本部から『法華経と世界立正平和運動 放射能の人体に及ぼす影響』という冊子が発版されました。この中に当時の増田日遠管長、世界立正平和運動本部総裁がその序文の中にこう述べられています。「昭和二十九年以来展開している原水爆禁止世界立正平和運動は、日蓮宗議会の議決による日蓮宗の運動であります。仏陀は『必要によつて物を与えられる』と説かれたが、原子力も平和産業に活用してこそ『是好良薬』であり、これを原水爆という『悪魔』たらしめているのは、それを持つ人間の『心』にあります」と書かれ、核実験禁止運動は一生懸命やるけれども、原子力の平和利用である原発については、これを除外するという趣旨が書かれていることを確認していただきたいと思ひます。

この昭和三十二年の九月の日蓮宗新聞によると、原水爆禁止世界大会に増田管長が自ら出席され、「原水爆禁止」を自ら力強く訴えています。当時の管長が自ら率先して運動されていることが、よく分かると思ひます。

こういう動きが五、六年間、続いていくことが当時の日蓮宗新聞を見ていただければ、よく分かります。

昭和三十八年、その頃になりますと、日蓮宗宗徒総蹶起運動が始まってまいります。だんだんと立正平和運動が、こういう宗門運動の中に吸収されていくという事態になっていくということが、新聞記事から観察できます。

昭和三十九年、東京オリンピックが開催された年ですが、この現代宗教研究所も戦後の平和運動の中で創立されます。この頃から、戦後の運動は沈滞し、体制化の道をたどっていきます。昭和三十九年といえますと、日蓮宗宗務院が、浅草から現在の池上に移転してまいりました。また戦争で焼けた池上の大堂が再建された年です。戦後の復興とともに、宗門の運動も、やや変化してまいりました。

これも日蓮宗新聞の記事ですが、当時の平和運動本部長茂田井教亨師の「世界立正平和運動は極左運動ではない」という声明です。ということは、「日蓮宗の立正平和運動は左に偏っている、政治運動化しているのではないか」という批判が起こり、それに対して当時の平和運動本部長はこういう発言をしているわけです。中濃教篤先生の文章を読みますと、こういう批判の中で、昭和三十九年、昭和四十年頃、立正平和運動は沈滞期を迎えると書かれています。これは昭和三十九年、身延山八十六世藤井日静猷下が、「世界平和の達成を願う」と、宗徒総蹶起大会の目標として「世界平和の達成を誓う」という記事です。

さて、この頃からベトナム戦争が一九六〇年から七十年代にかけて非常に激しくなっています。アメリカの戦略爆撃機B52が沖縄の嘉手納基地を飛び立ち北ベトナムを爆撃して帰ってくるという報道が毎日のようにありました。これは一九六八年、昭和四十年代ですが、原子力空母エンタープライズが佐世保に入港するということで、反対運動が起こりました。私も立正大学の学生のときですが、誘われてデモに参加して、「エンター反対、エンター反対」と叫びました。先日、一カ月ぐらい前に首相官邸前のデモに、参加というよりも、見学に行ってきたわけですが、このときは「再稼働反対、再稼働反対」という連呼でした。当時は学生が主力で先般の首相官邸前のデモは老若男女。ことに女性が多かったという印象でした。

一九六八年の安保反対運動です。これが有名な新宿西口の国際反戦デー、一九六八年十月二十一日のようすです。歌舞伎町の周辺に、火炎瓶の炎が舞ったという時代でした。私も、「これを見に行きたい」と言ったら、お寺のご住

職から「今日は危ないから、やめとけ」と言われて、行かなくて良かった、しかし、見てみたかったなというデモでした。

これは東大紛争のようですね。ゲバ棒を持って、方針の対立で、内ゲバといいますが、運動する、団体同士がこういうように対立するものですから、これを見ながらだんだん国民は冷めていきます。そして浅間山荘事件を境に、こういう過激な運動が退潮していきます。

この頃からマイカー時代と言われ、本格的に大量生産、大量消費の時代が始まるわけです。現在の若い人には想像もつかないと思いますが、「車を買う」ということが、一つの本当に大きな夢だったわけですね。現代から見ると粗末な車を、初任給を頭金に払って買って、「俺も買ったぞ」という時代が始まったわけです。

地方から人が集まり、多摩ニュータウンとか、赤羽の団地が造成されました。今日、こういう団地は、「孤独死」が目立つというアパートになっていったわけです。四十年、五十年という月日が、物事を変えてしまっています。

これは、一九七〇年頃、環境・エネルギー危機が問題となりました。これはローマクラブから出版された『成長の限界』。「人類は、すでにキャパシティからいって、もう成長の限界を迎えている」「もうこれ以上地球環境は、人間の大量生産、大量消費には耐えられない」ということを警告した本です。しかし、これは無視されました。

これが田中角栄首相の『日本列島改造論』。田中真紀子さんのお父さん、田中角栄さんは、当時の日本国民は「今太閤」として、歓呼の声で迎えたわけです。

この頃から、原発が建設されて、日本列島を新幹線と高速道路で結び地方を活性化させました。この原発は、地方の過疎地に経済格差を利用して押し付けたと言えると思います。福島から逃れた避難民の一人は、「地元にとって原発は金のなる木で麻薬のようなものだった」と反省を込めて述べています。

さて、原発問題は中央教化研究会議でどのように取り扱われてきたか、簡単に説明したいと思います。

まず昭和五十四年、スリーマイル原発事故のあと、原子力の平和利用というものは現宗研の会議の中で、「これは危険である」ということが指摘されました。「日本の原発は六百メートル以上離れていれば安全だと言うけれども、アメリカでは二十キロ以内には住宅は存在してはいけないとされている」という報告もあったわけです。続いて、放射性廃棄物の処理という大きな問題も、すでにその当時から指摘されています。

続きまして一九八二年、昭和五十七年の第五分科会の報告です。この中で、当時すでに原発が二十基運転されているということが確認され、そして、建設中、予定地は四十一基と報告されています。

これは平成元年、現在も囑託でいらっしやいます梅森寛誠師が、「私は、原発こそ人間が犯しつつある罪業の頂点に立つものと考えてる」と述べています。これは、平成十二年、当時の石川浩徳所長が、「日蓮聖人ゆかりの霊跡がある柏崎に、ひとつ間違えば重大な事故につながる原子力発電所が七基も設置されてあるのだ」と指摘されています。一九九九年、明日参ります東海村で事故が起こり、大内さんと篠原さんのお二人が亡くなりました。

これが大内さんの手のようすを写した写真です。看護師さんが最初は、「これが何で悪いの」と手が細胞が再生されないために悪くなったという写真です。

これは二〇一一年三月十一日、東日本大震災のようすです。福島第一原発に押し寄せる津波です。

そのあと現宗研は「とにかく各地の原発をできるだけ見て歩こう」と決めて、最初に行ったのが、石川浩徳所長がご指摘なさった東京電力柏崎刈羽原子力発電所です。日蓮聖人の銅像が建っている番神岬ばんじんさきから見た東京電力柏崎刈羽原子力発電所です。これは、出力八百二十万キロワットという、世界最大の原子力発電所です。中に入って説明を受けました。「地層処分というものは、まだ未解決の問題である」ということを係の人もおっしゃっておられました。

これは、マグニチュード七以上の大地震が起きた場所と原発の位置を示したものです。北米とヨーロッパ、ロシアの原発は地震地帯に建設されておりませんが、日本の原発だけが、地震地帯に建設されています。これは日本の原発

が危険であるという大きな理由です。

福島原発の事故のあと、仏教界からもいろんな反応がありました。これは永平寺の「仏の教えに背く原発」。去年の十一月に行われたシンポジウムです。これは、モンゴルに処分場をつくろうと思ったが、モンゴルから断られたという記事です。日本では岐阜県と北海道で地層処分技術の研究が進められています。しかし、四百メートル、五百メートルの地下の地層処分であっても、日本のような地震地帯では無理なのではないかと先行きは不透明です。

これが、全日仏の出しました「原発によらない生き方」の宣言です。これは日蓮宗の宗会で出された声明文、「将来に向けて、原子力発電に依らない持続可能なエネルギーによる社会の実現を目指す」という仏教タイムスに載った記事です。こういう仏教会の動きに対し先日出版された『現代仏教論』の中で末木文美士先生が、「とにかく仏教界は後追いだ」、戦争中は聖戦完遂をうたい、戦後は平和運動をうたい、それから原子力の平和利用を推進しているときには、原子力の平和利用を黙って認め、事故が起こったら原発の反対運動と、「仏教会は全くの後追いである」という批判をされています。

日蓮宗の平和運動のこれまでの展開と、それから、今日、福島原発の事故以来、直面している問題とを、ごく簡単に紹介させていただきます。ご清聴、ありがとうございます。

司会 ここで、では質疑応答を行いたいと存じますが、何かご質問、あるいはご意見のあるかた、挙手を願います。特にございませんでしょうか。

では、急な振りをいたしますが、瀬戸上人、武田上人、何かコメントを頂けると。

瀬戸 じゃ、すみません。一つだけ。

今、スクリーンの中でマグロのところの写真がありますね。福島の風評の始まりということで、私もそんなに強く物申すとかじゃなくて、普通に聞いていただければと思いますが、やはりどうしても、福島県内、県外においても、この「風評」という言葉は、どうしても強く使われてしまっていますが、福島としましては、一応風評ではなく実害を受けています。

私もいろんな場所に向いてお話をさせていたideている中で、やはり、どうしても風評被害というところで話が止まってしまっているというのが、訴える力のまた弱いところであると、常々反省しております、こういう場をお借りして、ご理解いただければと思っております。

ただその県内ですらニュース等では「風評」という言葉を使っております、だからマスコミも含めて、そのへの認識の甘さというものを、私は日々感じております。

司会 はい、ありがとうございます。

武田上人、いっていいですか。

武田 はい。

司会 はい。では特にないようでございますならば、これをもちまして、所長の基調報告「原子力文明再考」を終了させていただきます。お疲れさまでございました。

基調報告

「原子力文明再考」

日蓮宗現代宗教研究所長 三原正資

人の心やうやく善の智慧ははかなく、悪の智慧かしこくなりしかば・・・世をさまることなし。・・・ゆへいかんとなれば、衆生の貪瞋癡の心のかしこきこと、大覺世尊の大 善にかしこきがごとし。（『智慧亡國御書』定遺1128～9頁）

いったいつから、〈いのち〉を脅やかすこのように危うい世界になったのか。平和の祭典ロンドンオリンピックの会場を流れるテムズ川には空母や戦艦が待機し、高層ビルの屋上には〈バトル オブ ブリテン〉以来の備えといわれる地对空ミサイルが配置され、街角には機関銃をもった兵士が立った。これが文明世界の姿だとしたら、私たちの文明の歩みは正しくなかったのではないか。その岐路はいつだったのか。

昭和20年（1945）7月16日、アメリカはニューメキシコの砂漠の中で世界初の原子爆弾の実験に成功し、翌月、ヒロシマとナガサキでその威力を証明した。世界がいやおうなく原子力文明の時代に突入した瞬間である。その後、核による軍拡競争は今に至っている。後世の歴史家は1945年こそが人類が自滅と衰亡へと歩んだ分岐点と見るかもしれない。

連合国による占領下にあったとはいえ、わが国の人びとが時代の流れに対して戦前と変わることなく従順であったことは、原爆七回忌の昭和26年（1951）に出版された広島被爆遺児作文集『原爆の子』（岩波書店）の「序」の言いまわしにあらわれている。

このフェニックスは原子砂漠に萌え出た木々の若芽のように、道徳の力の勝利を確信し、人類の未来に対する明るい期待に若々しい胸をふくらませ、原子力が持つ「偉大な善をもたらす」道一原子力の平和的利用に力強い期待をかけている。広島街々に原子エネルギーを動力とする灯火が輝き、電車が走り、工場の機械が回転し、そして世界最 初の原子力による船が、広島港から平和な瀬戸内海へ出て行くことを。実際広島こそ平和的条件における原子力時代の誕生地でなくてはならない。

それから60有余年、このヒロシマが、「偉大な善をもたらす」道とまで持ち上げた「原子力の平和利用」という咒縛から脱するためには「3・11」フクシマの犠牲を必要としたのであった。

ところで、日蓮宗の場合はどうだったのか。

昭和32年（1957）、日蓮宗世界立正平和運動本部発行の『法華経と世界立正平和運動 放射能の人体に及ぼす影響』（平和叢書第三輯）には、つぎのように述べられている。

仏陀は「必要によって物を与えられる」と説かれたが、原子力も平和産業に活用してこそ「是好良薬」であり、これを原水爆という「悪魔」たらしめるのは、それをもつ人間の「心」にあります。

原子力の平和利用＝原発は「是好良薬」と、最高の讃辞を与えられていたのだった。

この頃から、わが国においては核実験禁止運動のひろがりと同様に、昭和35年（1960）、茨城県東海村に日本初の商業用原発・東海発電所建設が始まり、各地に原発建設が計画され、着工、そして稼動するに至った。

昭和45年（1970）、大阪万博の歓呼の中で「原子の灯」がともされたことを記憶している人もいだろう。その後、エネルギー危機や地球温暖化等の環境問題の渦中で脚光を浴びつづけた原発に多くの人びとが疑問をいだききっかけになったのが、昭和54年（1979）に起こったアメリカのスリーマイル島原発事故、そして昭和61年（1986）の旧ソ連のチェルノブイリ原発事故だった。

昭和54年、現代宗教研究所が開催した第12回中央教化研究会議の基調報告には
核兵器だけでなく「原子力の平和利用」にも私たちはまた危機的な様相を見ないわけにはいきません。

と述べられ、昭和57年（1982）の第14回中央教化研究会議第五分科会資料には
現在日本では20基が運転され、建設中・予定は41基となっています。・・・万一事故が発生すれば、大変な惨事となる事は必定である。

と記され、その原因については、

企業や政治の大衆操作に乗って欲望充足の現在の生活を維持しようとする人々のエゴイズムが危機を深める原因になっているのです。（第12回中央教研基調報告）と考えていた。

しかし、それから30年、宗門の内外を問わず、欲望充足の生活を反省すること＝（少欲知足）が真剣に問題されることはなかった。バブル崩壊後、「格差社会」に変貌しつつも、日本社会は麻薬中毒患者のように経済成長を求め続けてきた。

そして「3・11」が起こった。その年のすえ、平成23年（2012）12月1日、全日本仏教会は〈宣言文 原子力発電によらない生き方を求めて〉を発表した。その末尾にはつぎのように記されている。

私たち全日本仏教会は「いのち」を脅かす原子力発電への依存を減らし、原子力発電に依らない持続可能なエネルギーによる社会の実現を目指します。誰かの犠牲の上に成り立つ豊かさを願うのではなく、個人の幸福が人類の福祉と調和する道を選ばなければなりません。

そして、私たちはこの問題に一人ひとりが自分の問題として向き合い、自身の生活の在り方を見直す中で、過剰な物質的欲望から脱し、足ることを知り、自然の前で謙虚である生活の実現にむけて最善を尽くし、一人ひとりの「いのち」が守られる社会を築くことを宣言いたします。

宗内では、平成24年（2012）3月9日、日蓮宗第百四定期宗会 宗会議員一同によって、「東日本大震災復興支援に関する声明文」が発表され、その中には

将来に向けて、原子力発電に依らない持続可能なエネルギーによる社会の実現をめざします。

と述べられている。

現代宗教研究所は今年（平成24年）5月に福島第一原発警戒区域へ、6月には〈原発銀座〉といわれる福井県嶺南地方へ調査に行った。そこであらためて確認したことは、危険な原発に毎日の生活を託している人びとがいるという地方の厳しい現実があることだっ

た。それは国際的な経済競争にさらされている日本の姿でもある。

しかし、同時に「トイレなきマンション」といわれるように、原発稼動によって残される高濃度放射性廃棄物の処理の問題は全く未解決のままであるという重い事実がある。私たちは現在の繁栄のために未来の世代へ負の遺産を積み上げているのである。加えて、ひとたび原発事故が発生した場合の危険については、「3・11」が今もお物語っている。

立正安国を目標にかかげる日蓮宗には、より良い社会を実現していく使命がある。教師一人ひとり、その使命に照らして原発問題を討議し、袋小路に追こまれたかのような現代社会の行くえについて熟考していただきたい。現在直ちに原発0に向かって取り組み始めたとしても、私たちの前には廃炉と新エネルギーシステム構築のためには、50年もの時を必要とする困難な道が広がっているのである。